



少年野球チームにおけるコーチングの実態 : 少年野球指導者へのインタビュー調査から

芝, 利晃
高田, 義弘
高見, 和至
前田, 正登

(Citation)

体育・スポーツ科学, 23:23-35

(Issue Date)

2014-06

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002693>



少年野球チームにおけるコーチングの実態 — 少年野球指導者へのインタビュー調査から —

芝 利晃¹⁾, 高田 義弘²⁾, 高見 和至²⁾, 前田 正登²⁾

Actual conditions of coaching in boys' baseball teams — From interviews to surveying those coaches —

Toshiaki Shiba¹⁾, Yoshihiro Takada²⁾, Kazushi Takami²⁾, Masato Maeda²⁾

Abstract

This study aimed to examine methods for coaching in boys' baseball players from the technical coaching and the coaching concepts. Semi-structured, in-depth, open-ended interviews were conducted with 16 head coaches of elementary school baseball teams in Nishinomiya, Hyogo. Application of Cote et al. (1993)'s qualitative data analysis method revealed that coaches' perception of coaching concepts had three components: basic skills, technical skills, and tactics. Coaches gradually adapted their coaching concepts to players' skill level and age. Analysis revealed that coaching on base running and basic running were insufficient. This research also indicated that coaches provided support to the children regarding personal growth.

Key Words : interview, boys' baseball, head coach, coaching method

キーワード : インタビュー, 少年野球, 監督, 指導方法

1. 緒 言

野球は、身近な競技スポーツとして全国各地で数多くの大会が行われており、春季および夏季の高校野球、甲子園大会では全ての試合が連日のようにテレビやラジオで放送されている。また、他にもプロ野球中継やニュース番組など、日常生活の中で野球に関することを目にする機会は多い。我が国の野球のレベルは、2006年、2009年のWBC (World Baseball Classic) に2大会連続で優勝したことや、最近では2013年の世界少年野球大会において優勝するなど、世界屈指の水準にあるといえる。それらの世界での高い競技レベルを維持している理由の一つとして、幼少期からの質の高い野球経験ができており、つまりスポーツ少年団や地域クラブチームなどの少年野球が高いレベルにあることが考えられる。小学生の野球チームは平成24年度で13,914チームあり (全日本軟式野球連盟, 2014)、多くの小学生がそれらの少年野球チームに所属し、それぞれの

チームで監督やコーチによる指導を受けながら競技としての野球を行っている。池田 (2001) は、少年野球の現場には十分な知識を備えた指導者の存在が不可欠であり、そのような指導者を養成するシステムが必要であると指摘している。また、中村 (2008) は、指導者は技術的な指導方法と子どもを育てる指導理念を持つことが大切であるとしている。

野球の技術的な指導方法に関しては、金堀ら (2012) が、打撃の指導書の記述内容から、打撃の動作における指導者の意識が、動作局面が前半から後半に進むにつれ、「下肢」から「体幹」、「上肢」へとその対象が移行する傾向にあることを報告している。しかしこれらは指導書上での指導者の着眼点や意識の持ち方を示したものであり、実際の現場でどのように指導されているのかを具体的に明らかにしたものではない。

石井ら (1994, 1995, 1996) は、優秀な指導者は、選手の基本的な生活習慣の獲得を基本に、人間的成長を見据えて

1) 神戸大学大学院人間発達環境学研究科,
神戸市灘区鶴甲3-11

2) 神戸大学, 神戸市灘区鶴甲3-11

1 Graduate School of Human Development and
Environment, Kobe University, Tsurukabuto 3-11,
Nada-ku, Kobe

2 Kobe University, Tsurukabuto 3-11, Nada-ku, Kobe

指導にあたっていることを明らかにしている。また、北村（2005）は、優れた指導者のコーチング・メンタルモデルが、選手のパフォーマンス向上への熟達化、選手の自立志向性の意識化、および指導者による効果的支援の3つによって構成されており、パフォーマンス向上と同時に情緒的・社会的成長を目的とした、教育的な方向性も持つものであることを明らかにしている。これらの指導理念に関する報告は散見されるが、いずれも調査対象が中学生以上であり、小学生を対象にしたものではない。少年野球が学校教育の課外活動ではないこと、また指導者が小学校等の現役教員ではないことを考えると、実際の現場で指導に携わっている指導者が教育的観点を持っているかどうかは明らかではない。

池田（2001）が、指導者間で指導法を積極的に共有することの重要性を指摘しているように、野球における技術的な指導方法および指導理念の両方がともに指導者間で共有されることが現場の指導が向上し少年野球の普及発展につながるものと考えられる。

本研究では、兵庫県西宮市の少年野球チームを事例として、少年野球指導者における技術的な指導や指導理念から、少年野球における選手へのコーチング方法を検討することを目的とした。

2. 方 法

2-1. 調査対象

対象は、兵庫県西宮市にある小学生の少年野球チームであり、「西宮市野球協会」と「西宮市軟式少年野球連盟」に所属するチームの指導者を対象とした。本研究では、それら対象の指導者である監督に焦点を当てるため、本調査の打診に快諾を得た16チームの監督を調査対象とした。西宮市野球協会では、学校が母体となっており、スポーツクラブ21ひょうご事業によって設立されたクラブに所属しているチームである。西宮市軟式野球連盟は、市内近隣の小学生を対象とした複数のクラブチームから成り立っている。

2-2. 調査方法

本研究ではコーチングの主体としての対象者自身の認識を重視するため、個別性の高い広範囲な回答が得られることが重要であることから、調査は1対1の半構造的（semi-structured）、深層的（in-depth）、自由回答的（open-ended）インタビューにより実施した。インタビューに先立ち、北村ら（2005）、古賀・堀野（2013）の先行研究を参考に、①対象者の体験や認識について幅広く回答が得られるような基幹的質問項目（main question）、②語られたテーマ、意味、考え等についてその意味をより

明確にさせる追跡的質問（follow-up question）、および③語られた内容に的を絞ってさらに深く掘り下げる探索的質問（probes）の3種類の組み合わせにより構成した。

表1 少年野球インタビューにおける基幹的質問項目

I. チーム情報	①年齢 ②職業 ③競技歴 (1)野球経験, ポジション (2)野球歴 (3)その他のスポーツ経験 ④指導歴 ⑤チーム状況
II. 基礎技能	①投げることにに関してキャッチボールなどの基礎的な練習において指導を行っていますか ②ティーバッティングやトスバッティングなどの基礎的な練習において指導を行っていますか ③走塁ではなく、走ることにに関して指導を行っていますか ④捕ることにに関してキャッチボールなどの基礎的な練習において指導を行っていますか
III. 専門技能	①ピッチャーについて指導を行っていますか ②バッティングについて指導を行っていますか ③走塁について指導を行っていますか ④守備について指導を行っていますか
IV. 戦術	①バントの練習を行っていますか ②バスターの練習を行っていますか ③エンドランの練習を行っていますか ④スクイズの練習を行っていますか
V. 指導方針	①チームとしての目標はありますか ②指導する上での理念はありますか ③目標に応じたチーム編成の方針はありますか ④指導のポイントはどこで学びましたか ⑤少年野球を指導する上で何か特別なことはありますか

なお、インタビュー内容を理解してもらうために、事前にインタビュー・ガイドを調査対象者に提示した。なお、本調査は2013年8月から9月にかけての2か月間で行った。インタビューは筆者自身が実施し、指導者が指導している学校やグラウンド、クラブハウス等において実施し、平均所要時間は約60分であった。インタビュー内容は対象者の承諾を得た上で全てICレコーダーに録音した。

2-3. 分析方法

インタビューによって得られたデータは筆者自身によりテキスト化（テープ起こし）した後、Cote et al. (1993) による質的データ分析法に基づき分析を行った。3つのステップにより分析を進めた。

① 標題作成

テキスト化されたインタビューデータを、一つ以上の概念あるいは見解を含む意味単位（meaning unit）に分け、意味単位ごとに標題をつけた。

②サブカテゴリーの作成

全ての標題を比較し、類似した内容を持つ意味単位を共通の上位概念として括れるサブカテゴリーへと再編成し標題をつけた。例えば、意味単位の内容を、それぞれの意味単位が得られたインタビューのテキストデータを参照し、データの文脈を考慮し、意味単位間の因果関係や事象の変化に注目しながら関連付けていった。(表4を参照)

③カテゴリー概念化

再編成されたカテゴリー群はより広く抽象度の高いレベルの大カテゴリーへと統合した。統合したカテゴリーに対して、コーチングに関するカテゴリー間の関連性が新たに見出せなくなるまで検討した。(表4を参照)

2-4. 調査方法に関する配慮

第1に、インタビューの方法や手順、データ分析の方法を可能な限り明らかにし、どのような過程で研究が行われたのかを明示する。第2に、インタビューを半構造的に実施することにより、複数名の対象者へのインタビュー内容の均質化を図ることでデータ収集に関する確実性を考慮した。また、根幹的質問項目、回答内容を発展させる追跡的かつ探究的質問項目を用い、ある程度の柔軟性をもたせながらインタビュー項目の均質化を図った。第3に、インタビューは、インタビュー実施者が対象者の回答を誘導するような質問にならないように配慮し、対象者自身が使った言葉をできるだけ反復し、意味内容を理解するようにして、インタビュー実施者の影響を軽減することを考慮した。第4に、筆者によって抽出されたインタビュー結果の各カテゴリーの妥当性を確保するために、インタビューデータを2名の野球経験者を含む共同研究者で共有し、数回に渡るディスカッションを通して分析を行い、分析結果の完全な一致を確認することにより確保されたと判断した。

3. 結果および考察

インタビュー調査の結果として、まず、指導者情報とチーム情報を分析し、次に、基礎技能や応用技能、戦術、および指導方針について分析した。

3-1. 指導者に関する情報

監督の年齢の平均は 47.0 ± 8.8 歳で、16チームの中での最年長は70歳、最年少は36歳であった。現在の職業は会社員が10名と最も多く、自営業が2名、公務員、整備士が各1名で、その他、会社を定年退職した者が1名、主婦が1名であった。

野球経験に関しては、14名が野球経験者で、そのうち5名が大学や社会人まで選手であった経験を有していた。小学校や中学校では軟式野球を、高校では硬式野球を経験し

ていた者が多かったが、中学生から硬式野球を経験していた者が3名いた。また、野球の経験はないものの、ソフトボールを経験していた者が2名おり、このうち1名は女性であった。ソフトボールの経験者を含め、自身がプレーをしていた時の守備のポジションは、内野手が6名で最も多く、次いで捕手が4名、投手および外野手が3名ずつであった。指導歴としては、通算で最長が27年、最短でも3年の指導経験を有していた。監督としては22年間の経験があるとした者を除けば、監督歴が8年未満であった。また、指導者は自身の子どものチームに在籍時にコーチになり、子どもが退団した後も継続してチームに携わり続けている者であった。コーチを数年経てから監督になることが多く、コーチになるきっかけは、ほとんどの監督が「自身の子どものチームに入った」ことを理由としていた。

表2 指導者情報

指導者	年齢 (歳)	職業	野球経験	ポジション	指導歴 (年)	監督歴 (年)
A	42	会社員	社会人まで	捕手	3	1
B	70	退職	なし	捕手	10	1
C	45	会社員	社会人まで	投手	4	1
D	37	整備士	なし	投手	10	4
E	37	会社員	高校まで	捕手	11	5
F	55	自営業	中学まで	捕手	19	8
G	36	自営業	高校まで	投手	4	1
H	50	会社員	中学まで	内野手	6	2
I	48	会社員	社会人まで	外野手	12	3
J	46	会社員	高校まで	外野手	16	4
K	52	会社員	高校まで	内野手	17	7
L	41	会社員	高校まで	内野手	13	6
M	60	主婦	社会人まで	内野手	27	22
N	46	公務員	中学まで	外野手	6	1
O	47	会社員	社会人まで	内野手	10	7
P	40	会社員	中学まで	内野手	11	2

3-2. チーム情報

チームに所属する選手の人数の平均は 35.3 ± 8.3 人であった。16チームのなかで部員数が最も多いチームは54人であり、最も少ないチームは23人であった。選手の人数に関しては、学年毎に平均的に選手が在籍しているチームもあれば、一学年に密集して多くなっているチームもある。一方で、1人もいない学年があるようなチームも存在し、チーム構成にばらつきがみられた。コーチの人数は平均 16.0 ± 8.8 人であり、コーチの人数が最も多いチームは30人であり、最も少ないチームは5人であった。コーチは野球部OB、もしくは現役選手の保護者で構成されていた。コーチ一人あたりの選手の人数は平均値が 2.9 ± 2.0 人であった。コーチ一人あたりの選手の人数が最も多いチームで8.8人であり、最も少ないチームで1.1人であった。コーチ一人当たりの人数に関してもばらつきがみられ、最も少

ないチームは1対1に近い形で選手を見ることができ、指導が行き届きやすいと考えられる。一方で最も多いチームはほぼ9人に1人の状況で、全員に目が行き届いた指導をするのが困難な状況であった。

チームの主な戦績として、今年度の大会に入り、3位以上として表彰に関わったチームは16チーム中12チームであった。その中でも優勝を経験したチームは16チーム中6チームであった。その他、1回戦や2回戦で敗退してしまうチームもあった。3位以上の表彰に関わらなかったチームは4チームあり、前年に表彰までいったチームであっても、勝つことが出来ていないチームもある。今回の調査では、それぞれのチームで各学年の入部希望者にばらつきがあり、毎年チームを勝利に導くのは難しいのではないかと考えられる。

表3 チーム情報

指導者の所属チーム	選手の人数	コーチの人数	今年度の最高戦績
A	27	8	優勝
B	40	8	3位
C	44	5	特になし
D	34	7	特になし
E	38	17	準優勝
F	44	33	準優勝
G	35	32	優勝
H	32	15	特になし
I	26	15	優勝
J	35	10	3位
K	23	20	優勝
L	29	13	優勝
M	54	30	優勝
N	41	18	準優勝
O	25	10	優勝
P	39	15	3位

3-3. 基礎技能

●投げる

「腕の振り方」、「離すポイント」、「重心動揺」、「足の位置」、「軸」、および「子どもにあった投げ方」の意味単位は、指導の中で投げる際の技術的方法として、「投げ方」のサブカテゴリーに括られた。指導者Oは「その子に合った投げ方で出来るだけいい方法を考えてあげる」と述べている。このように、一人ひとりの子どもたちに合った投げ方を教えることが目指されている。それに加え、「踏み出す足を投げる方に正対して真っ直ぐ出し、基本は軸で立ってまっすぐ足を出すということ」（指導者C）といった細かい指導に発展していく指導者もいた。投げ方に関して、上肢の動き以上に下肢の動きの項目が挙げられている。福富ら（2013）は、投動作の未熟な段階においては、上肢の動作に依存していると述べている。また上肢の動作と障害の関係について、伊藤ら（2012）は、肩関節・肘関節の痛

みは上肢の動きに依存しているからであると述べている。「昔と違って肩と肘が弱い、故障が多い」（指導者L）の回答からも、小学生の投球障害の現状を示している。そのため、障害予防の観点から、下肢を中心とした動作を教えていることが示唆された。

「短い距離」、「正確性」、「勝負強さ」、「ボールの高さ」、および「距離感」は、投げる際に選手が注意するポイントとして、「投げる際の注意点」のサブカテゴリーに括られた。指導者Gは「例えば2アウトランナー3塁のサードゴロを1塁に放る時のここの勝負強さを意識しろって言う」と述べている。注意点を選手に伝えることで、選手自身がより理解し練習に取り組むことが出来ることを目指していた。

「ベッタン」、「ボール回し」、「シャドウピッチング」、「ネットスロー」、「ランニングスロー」、および「コップに水」の意味単位は、指導する際に、工夫を行い取り入れているものとして、「練習方法」のサブカテゴリーに括られた。指導者Jは「投げ方が悪い子に関して、コップに水を入れて、コップの水をこぼさないように前に投げる」と述べている。こうした練習を取り入れることで、「出来る限り飽きない」と指導者Hが言うような、選手が長続きする形での練習方法の工夫が行われていた。

「投げ方」、「投げる際の注意点」、および「練習方法」のサブカテゴリーは、キャッチボールなどの基礎的な練習で行われる投動作の指導として、「投げる」の大カテゴリーに括られた。

●打つ

「レベルスイング」、「最短距離」、「左肘」、「体重移動」、および「足の位置」の意味単位は、指導の中で打つ際の技術的方法として、「打ち方」のサブカテゴリーに括られた。指導者Kは「緩い球を一切引っ張らずに逆方向に打つ。これは内側からバットが出せない出来ない技ですし、外側からバットが入ると引っ張ってしまうので」と述べている。トスバッティング（以下、トスとする）やティーバッティング（以下、ティーとする）の基礎的な練習では、後述の打撃との違いについて、ボールの速さや実践の場面ではないことを明らかにした上で、振り方を述べていた。

「イメージ」、「フルスイング」、「選球」、および「楽しさ」は、打つ際に選手が注意するポイントとして、「打つ際の注意点」のサブカテゴリーに括られた。指導者Aは「自分の嫌なコース来たら打つなよと、わざわざ打ちに行ったら練習の意味がなくなる。100球、200球打つよりも真剣な20球打つ方が、価値がある」と述べている。この指摘は、選手自身の行動への注意点になっており、練習態度にも繋がるものであった。

「サンドボール」、「ノックを打たせる」、「素振り」、「早

表4 基礎技能のカテゴリー

分析テーマ	大カテゴリー	サブカテゴリー	意 味 単 位	回 答 例
基 礎 技 能	投げる	投げ方	腕の振り方 離すポイント 重心移動 足の位置 軸 子どもにあった投げ方	上から投げなさい・肘から出す 離すところを覚えないと 重心移動をっていうのを 踏み出す足を投げる方に正対して真っ直ぐ 基本は軸足で立って 子どもが投げやすい投げ方で
		投げる際の注意点	短い距離 正確性 勝負強さ ボールの高さ 距離感	長い距離はいらない 相手の胸に ここの勝負強さを意識 こういう時はこの高さ 目標に対する距離感
		練習方法	ベッタン ボール回し シャドウピッチング ネットスロー ランニングスロー コップに水	下にメンコを投げるベッタンを ボール回し シャドウピッチング あそこにネットスローをね ランニングスローっていうのが コップに水を入れてコップの水をこぼさないように前に投げる
	打 っ	振り方	レベルスイング 最短距離 左肘 体重移動 足の位置	レベルスイングを バットを内側から出すこと 左ひじの使い方・意識 体重移動であるとか 足を開いたりしない
		打つ際の注意点	イメージ フルスイング 選球 楽しさ	遠くに飛ばすイメージ 思い切り振ること・フルスイング 嫌なコースに来たら打つなよ 打つ楽しさ、飛ばす楽しさ
		練習方法	サンドボール ノックを打たせる 素振り 早振り バットの重さ ロングティー	サンドボールを打たせる ノックを打つときに 素振り 30秒で20回 重いバットを使って・ノックバットで素振り ロングティー
	走 る	走り方	姿勢 腕を振る	前傾姿勢・姿勢 腕を振り
		練習方法	ラダー ミニハードル レパートリーダッシュ カーフレイズ もも上げ	ラダーで ミニハードルを ダッシュもうつ伏せ正座仰向け カーフレイズとか もも上げ
	捕 る	捕り方	グラブの芯 グラブの向き 両手で捕る 顔に近いところ 捕るタイミング 正面に入る	グラブの芯で グローブの向き 両手で捕ること 顔に近いところで ショートバウンドで捕る、上がってきたところで捕る 正面に入ろうと
		捕る際の注意点	試合想定 守備位置別 注視	試合を想定した 自分の守備位置を想定 捕ったら3秒見る
		練習方法	壁当て アメリカンノック ベッパ 素手 ランダンキャッチボール	壁当て アメリカンノック ベッパとか グローブを外させる ランダンキャッチボール

振り」、「バットの重さ」、および「ロングティー」の意味単位は、指導の中で工夫し取り入れているものとして、「練習方法」のサブカテゴリーとして括られた。指導者Cは「選手自身にノックを打たせて相手が守っているところに正しく打つと、ノックを打つときにクロスでボールを投

げて軸足に体重が乗ってこのトップの形が出来る」と述べている。このように、練習方法の中にいつもと違うことをさせて、無意識的にその形を覚えさせようとする指導者もいた。また、素振り、早振りやバットの重さを重くすることで、「バットスイングを速くする」（指導者N）が目指さ

れていた。中島・図子（2009）は、バッティングのパフォーマンスを高めるためには、バットの「ヘッドスピード」を高めることが必要であると指摘している。「小学生ってパワーがない」（指導者G）という回答からも選手の振る力が不足していることが指摘されており、練習方法を工夫することで振る力をつけることが目指されていた。

「打ち方」,「打つ際の注意点」, および「練習方法」のサブカテゴリーは、ティーやトスなどの基礎的な練習で行われるものとして、「打つ」の大カテゴリーに括られた。

●走る

「姿勢」,「腕を振る」の意味単位は、指導の中で走る際の技術的な方法として、「走り方」のサブカテゴリーに括られた。指導者Eは「前傾姿勢だけ、前に倒すだけ、それ以外のことは教えない」と述べている。走り方については、指導を行っている指導者は基礎技能の「投げる」「打つ」「捕る」に比べ非常に少なかった。指導者Kが「足の速さの指導は一切していません。そんな時間もないですし、それよりも走塁の技術」と述べているように、今回の調査からは後述する「走塁」についての技術を必要としている傾向がうかがえた。

「ラダー」,「ミニハードル」,「レパートリーダッシュ」,「カーフレイズ」, および「もも上げ」の意味単位は、指導の際に工夫して取り入れられているものとして、「練習方法」のサブカテゴリーに括られた。指導者Jは、「必ず朝のアップの時にはもも上げでダッシュ。それと、ラダーを小股で踏んでそこからダッシュ」と述べている。このようにして、走り方について指導は行わなくても、準備運動などの中で、走ることを取り入れている傾向もうかがえた。

「走り方」,「練習方法」のサブカテゴリーは、走るという基礎的な練習に関するものとして、「走る」の大カテゴリーに括られた。

本調査では、走ることの指導を行っている指導者は今回の調査では半数にも満たなかった。各チームが練習を行う日は土曜日や日曜日の休日であり、週に2回しかないことや、グラウンドでの練習は午前もしくは午後のみというチームもあり、走ることに特化した練習をするには、練習場所や時間等の環境整備が必要ではないかと推察される。

●捕る

「グラブの芯」,「グラブの向き」,「両手で捕る」,「顔に近いところ」,「捕るタイミング」, および「正面に入る」の意味単位は、指導の際の技術的方法として、「捕り方」のサブカテゴリーに括られた。指導者Cは、「やっぱりグラブの芯で捕るっていう、グローブできっちり捕るっていうことを教えるようにしていますね」と述べており、捕る動作のグローブの扱い方やグラブの動かし方を指導している。

「試合想定」,「守備位置別」, および「注視」の意味単位は、キャッチボールなどにおいてボールを取る際に選手が注意するポイントに関するものとして、「捕る際の注意点」のサブカテゴリーに括られた。指導者Hは「キャッチボールやらせてもストライクばかり投げられる子はほとんどいないので、キャッチボールを、打球を捕る時の延長線でまず受けなさい」と述べている。このようにして、基礎的な練習において、応用技能に結び付けていくための練習をキャッチボールから行っている。グラブを使った捕り方に関して、グラブの芯で捕ること、グラブの向きやグラブを含めた両手で捕ることが指導されていた。神田・渡辺（1961）は、捕球後の動作を考え両手で捕り、グラブの中心で捕らなければならないことを述べている。捕ることそのものは捕球後の動作と関係はないが、捕ることを指導する段階で捕球後の動作を考え、選手に指導していることが示唆された。

「壁当て」,「アメリカンノック」,「ベッパ」,「素手」, および「ランダンキャッチボール」の意味単位は、指導の中で工夫して取り入れられているものとして「練習方法」のサブカテゴリーに括られた。指導者Hは「当たって痛いとか、やっぱり恐怖心っていうのを出来るだけ早く取り去ってあげたいと思うので、手で手ゴロっていうんですね」と述べている。このようにして、指導者は練習方法の工夫を行っている。

「捕り方」,「捕る際の注意点」, および「練習方法」のサブカテゴリーは、キャッチボールなどの基礎的な練習での、捕球動作に関する指導として、基礎技能の「捕る」の大カテゴリーに括られた。

指導の対象が子どもであることもあり、基礎技能の練習方法は、指導者ごとに様々な工夫がなされていた。永井（2004, 2007）は、子どものスポーツに大人の練習方法や動き方を教えることは、子どもの発達において不適切であることを述べている。少年野球のレベルに合わせた練習方法の工夫することが重要であると考えられる。

3-4. 応用技能

●投球

「軸」,「下半身主導」,「リリースポイント」,「体重移動」,「上半身の使い方」,「腕の振り方」,「歩幅」,「ボールの握り方」,「windアップ」, および「グラブの使い方」の意味単位は、投手に指導する際の投球動作の技術的方法として、「投球フォーム」のサブカテゴリーに分けられた。指導者Iは「上と下のバランスの良い投球フォームが理想的。下半身を上半身につなげることで良いフォームで投げることが出来る」と述べている。また、指導者Jは「腕をしっかり振り切る。これも下半身から始動して下半身で投げる」と述べている。これらの言及から、先述した

表5 応用技能カテゴリー

分析テーマ	大カテゴリー	サブカテゴリー	意 味 単 位	回 答 例
応 用 技 能	投 球	投球フォーム	軸 下半身主導 リリースポイント 体重移動 上半身の使い方 腕の振り方 歩幅 ボールの握り方 ワインドアップ グラブの使い方	軸足の・頭はあくまでも軸 ヒップファースト 耳の前でボールを 踏み足に重心・足の親指にグッと体重 肩の開きを抑える・左肩だけは 肘の始動・腕をしっかり振る 歩幅の調節・足の出し入れ ボールの握り 振りかぶって グローブの重りを
		投球時の注意点	ルール コントロール 平常心 投球後の守備	ボークで・牽制のやり方 そこに投げ込むって・ミットに投げ込む・コースいっぱい いかに動揺せずに・ハート 投げた後の守備
	打 撃	打撃フォーム	グリップから 軸 トップ 下半身主導 体重移動 レベルスイング 回転 構え	グリップから出す 軸で回転 トップの位置 下半身主導 体重移動 レベルスイング 腰から回転で 形を・形から入る
		打撃時の注意点	スイング ミートポイント 選球 タイミング 真似	思い切り振らせる・振りぬく ボールが自分のポイントに ボールの見極め 上手くタイミング カッコいいと思う人を真似ろ
	走 塁	走り方	ベースの回り方 スピード 離塁 帰塁 盗塁 スライディング	ベースの回り方・走るコース スピードを落とさないために リードをとって 頭から帰る 盗塁の 滑ること
		走塁時の注意点	凡打 状況判断 進塁 ルール 思い切り 野球勘	フライが上がっても全力 ボールを捜す 次の塁を狙う ルールを覚えさせる 思い切りのいい 野球勘
	守 備	守り方	タイミング 形 正面に入る 持ち替え グラブ	リズムを作る・ショートバウンドで 入り方 正面に入る おへそで持ち替え グローブを出す
		守備時の注意点	切り替え 声掛け 状況判断	エラーした後の切り替え 必ず声掛けろ 状況をつけて・状況判断
		守備隊形	中継 カバー フォーメーション	中継とか カバーに回る フォーメーション
		ポジション	固定 複数	基本固定 最低2つ

基礎技能の項目と違い、より応用的なことを指導されている。阿江・藤井（2002）は下肢によって生み出された力がタイミングよく伝達されることで、運動連鎖の原則が成り立つことを指摘している。今回の調査でも指導場面において、下肢から上肢の末端であるリリースポイントまでの、

投手のフォームを全体的にみたフォームの指導が行われていた。

「コントロール」、「精神力」、「投球後の守備」、および「ルール」の意味単位は、投球の中で選手が注意するポイントとして、「投球時の注意点」のサブカテゴリーに括ら

れた。指導者E「ピッチャーのことに关してはまずルールやね、ツアアウト3塁からボークで1点は悲しい」と述べている。違反投球は、ピンチの拡大や相手に1点を献上してしまうことから、牽制やフォームのルールに関して指導を行っていた。

「投球フォーム」、「投球時の注意点」のサブカテゴリーは、投手の投球という応用的な技能として、「投球」の大カテゴリーに括られた。

●打撃

「グリップから」、「軸」、「トップ」、「下半身主導」、「体重移動」、「レベルスイング」、「回転」、および「構え」の意味単位は、実践的な打撃において指導する技術的方法として「打撃フォーム」のサブカテゴリーに括られた。指導者Cは「ピッチャーが始動するときには上手く軸足に体重を乗せた時のトップですね」と述べている。投げてくる投手に対してどういった形でフォームを作るのかを、具体的に指導していた。

「スイング」、「ミートポイント」、「選球」、「タイミング」、および「真似」の意味単位は打撃時に選手が注意するポイントとして、「打撃時の注意点」のサブカテゴリーに括られた。指導者Aは「へそを自分のポイントにきた時に向けたれと、バットがへそを向けることによって身体が自然に回っていくから、腰は回る」と述べている。具体的な身体の動かし方を選手に伝え、選手に注意させた上で、実践させていることがこれらからうかがい知ることが出来る。

「打撃フォーム」、「打撃時の注意点」のサブカテゴリーは、実践的な打撃の際に指導するものとして、「打撃」の大カテゴリーに括られた。

バッティングフォームの中で下肢では体重移動、体幹では腰の回転、上肢ではグリップから出す、といった体の一連の動きや構えとしての形などが指導されていた。金堀ら(2012)は指導者を対象にした打撃に関する指導の着眼点として、打撃は全身運動であり、包括的に捉えた全体的な指導と部分的な指導が行われていると報告している。本調査からもそれが支持される結果となった。

●走塁

「ベースの回り方」、「スピード」、「離塁」、「帰塁」、「盗塁」、および「スライディング」の意味単位は、実践的な走塁において指導する技術的方法として、「走り方」のサブカテゴリーに括られた。指導者Cは「チームが勝つうえで、すごい重要になっていうことが最近分かってきたので、なるべく走塁の方に時間を割くようにしています。」と述べている。この回答だけでなく、多くの指導者から試合に勝つうえで走塁の重要性が指摘された。しかし、「興味を持ってくれたらね」(指導者P)というように、選手

自身は走塁に対してあまり興味がないということも明らかになった。山本(2012)が、野球における走塁の技術の重要性について述べているように、しっかりと選手に走塁の重要性を伝えることの大切さが重要なのではないかと考えられる。

「凡打」、「状況判断」、「進塁」、「ルール」、「思い切り」、および「野球勘」の意味単位は、走塁時に選手が注意するポイントとして、「走塁時の注意点」のサブカテゴリーに括られた。指導者Jは「まずは思い切り走ること。下手だろうが誰だろうが出来ることなので」と述べている。こうした注意点を選手だけでなくチームとして習慣化することが目指されていた。

「走り方」、「走塁時の注意点」のサブカテゴリーは、ベースランニングなど、実践的な指導に関するものとして「走塁」の大カテゴリーに括られた。

●守備

「タイミング」、「形」、「正面に入る」、「持ち替え」、および「グラブ」の意味単位は、守備位置に就いた際の指導する技術的方法として、「守り方」のサブカテゴリーに括られた。指導者Kは「基本はまず正面、逆シングルが悪いことじゃないけれど、正面に入ることをベースに」と述べている。指導者が練習で教えることは、応用的な技能であつても基本的なことから教え、まず形をしっかりと作ることが必要であることが指摘されていた。

「切り替え」、「声掛け」、および「状況判断」の意味単位は、守備での選手が注意するポイントとして、「守備時の注意点」のサブカテゴリーに括られた。指導者Mは「声を出す、まずとにかく。みんなが声を出して、オーライって言うこと」と述べており、全員がボールを見ている中で周囲とのコミュニケーションをとることが指摘されていた。

「中継」、「カバー」、および「フォーメーション」の意味単位は、守備に就いた時の他のポジションとの連携に関するものとして、「守備隊形」のサブカテゴリーに括られた。声掛けと関連して、指導者Mは「必ずカバーに回る」と述べており、守備時の注意点と同時に「守備隊形」を身に付けることを必要としていた。

「固定」、「複数」の意味単位は、守備位置に関するものとして、「ポジション」のサブカテゴリーに括られた。指導者Kは「中学校に行ったらどこにポジションが変わるか分からない」と述べている。このようにして、ポジションに関して「少年野球は終着点じゃない」(指導者O)というような、将来を見据えた指導が行われていた。その一方で、チーム内の選手の人数の関係上、ポジションを固定している指導者もいた。

「守り方」、「守備時の注意点」、「守備隊形」、および「ポ

ジション」のサブカテゴリーは、守備位置に就いた際の実践的な指導に関するものとして、「守備」の大カテゴリーに括られた。

功力（1992）は、守備力を高める方法として、実践的なシートノックなどを反復していくことが重要であると述べている。本調査からも、実践場面を想定した指導が行われており、ただ守るだけではなく、周りとの連携を意識した守備が上達に繋がると言える。

3-5. 戦術

●バント

「ランナー2塁」,「主軸以外」,および「相手次第」の意味単位は、バントを実践的に使う場面に関してものとして、「状況」のサブカテゴリーに括られた。指導者Bは「0アウト,1アウトまではさせます。この子らの野球は1つのミスがあれば点は入るんです。」と述べている。少しでもランナーを前の塁に進めるためにバントを戦術の一つとしていた。

「重要視」,「1球」,および「目的」の意味単位は、バントを選手にさせる際のポイントとして、「バントの注意点」のサブカテゴリーに括られた。指導者Kは「バントを軽視しない。転がすというのがバントじゃなくて、目的に応じて転がさなければならない」と述べている。

「相手へのプレッシャー」,「バントシフト」の意味単位

は、バントをされる側でのものとして、「バントをされた守備」のサブカテゴリーに括られた。指導者Fは「単にサードが前に出てくるだけでもバントのサインが出せなくなるから、それも戦術だと思う」と述べている。バントをされた時の守備を考えることも、戦術として指導者は捉えていることを指摘している。廣江（1986）は、バントに対する守備陣形が生まれたこと、バットが改良されバントがやりにくくなったことなどを挙げ、野球ではバントを重要視しなければならないことを指摘している。今回の調査からも、攻撃戦術だけでなく防御戦術としてもバントを重要視していることが推察された。

「状況」,「バントの注意点」,および「バントをされた時の守備」のサブカテゴリーは、攻撃面と守備面を含めた、「バント」の大カテゴリーに括られた。

●バスター

「器用さ」,「信頼」の意味単位は、バスターを実践で行う際の自チームの選手起用の判断の基準として、「特定の選手」のサブカテゴリーに括られた。指導者Mは「小学生にバスターは、ちょっと難しいかな」と述べている。バスターを小学生でさせることが難しいということが指摘され、「この子が出来る」（指導者I）といったように、練習の段階で指導者が見極め、試合では特定の打者にしかサインを出さないことが明らかになった。

表6 戦術カテゴリー

分析テーマ	大カテゴリー	サブカテゴリー	意 味 単 位	回 答 例
戦術	バント	状 況	ランナー2塁 主軸以外 相手次第	ランナー3塁を作る 4番以外、クリーンアップは キャッチャーが今肩が良くなってきて
		バントの注意点	重要視 1球 目的	バントを軽視しない 1球で決めてもらわないと 目的に応じたバント
		バントをされた時の守備	相手へのプレッシャー バントシフト	相手へのプレッシャーの意味も バントシフト
	バスター	特定の選手	器用さ 信頼	器用さが この子が出来る
		相手の守備隊形	バントシフト	相手が明らかにバントシフトを敷いてきた時
	エンドラン	状 況	相手投手の制球力 相手投手の牽制力 チャンス拡大 2アウトから ランナーの足が遅い 消極的打者	相手ピッチャーが乱れてない時 牽制の下手な チャンスを広げる 2アウトから ランナーに足遅い子で 消極的バッターにはエンドランを出して
		選手の役割	バットに当てる 転がす 盗塁	意識してバットに当てる 絶対にフライを上げない 空振りしても盗塁できるようなスタート
	スクイズ	状 況	確実に1点 ダメ押し 先取点 1発勝負	各回に1点ずつ取っていけば ダメ押しするのに 先取点とりたいとき 1発勝負
		種 類	スクイズ セーフティースクイズ エンドラン	スクイズ セーフティースクイズ ランナーが3塁の時のエンドラン・スクイズの代わり

「バントシフト」の意味単位は、バスターを実践で行う際、相手チームの状況の判断基準に関するものとして、「相手の守備隊形」のサブカテゴリーに括られた。指導者Nは「バントの守備位置を見るために構えさせて、前に突っ込んできたら、ちょっと打たしたろうかな」と述べている。このようにして、相手の守備隊形を観察し、するかしないかを定める指導者が多かった。

「特定の選手」、「相手の守備隊形」のサブカテゴリーは、戦術として使用する「バスター」の大カテゴリーに括られた。

●エンドラン

「相手投手の制球力」、「相手投手の牽制力」、「チャンス拡大」、「2アウトから」、「ランナーの足が遅い」、および「消極的打者」の意味単位は、指導者がエンドランのサインを出す場面に関するものとして、「状況」のサブカテゴリーに括られた。指導者Aは「相手ピッチャーがボール・ストライクはしっかりしてるとか、こっちのカウントが悪くなってる時にはちょっと出しにくい」と述べている。エンドランは、自チームの選手的能力だけでなく、相手チームの投手など様々な要因によって実践するかを決めることが指摘された。またバスターとは違い、指導者Eは「エンドランはみんな出来るようにしてもらわないと困る」と述べているように、エンドランは全員が出来ることが目指されていた。

「バットに当てる」、「転がす」、および「盗塁」の意味単位は、エンドランのサインが出た場合に選手が心がけることとして、「選手の役割」のサブカテゴリーに括られた。指導者Hは「ランナーは盗塁のつもりでいくんだよ、バッターは当てて基本転がす、フライは上げないように大きく振れよ」と述べており、選手のプレー中の役割を明確に示していた。また「空振りしても盗塁するようなスタート」（指導者K）をきることが重要とされており、エンドランの中でも走塁の技術を必要とすることが示唆された。

「状況」、「選手の役割」のサブカテゴリーは、戦術として使用する「エンドラン」の大カテゴリーに括られた。

●スクイズ

「スクイズ」、「セーフティースクイズ」、および「エンドラン」の意味単位は、点を取るために使用する、レパトリーとして「種類」のサブカテゴリーに括られた。指導者Kは「ランナーが3塁のエンドランをやっている、要はランナーが3塁にいる時の点を取る引き出しを増やしたいんですね」と述べているように、どのようにすれば1点でも多くとることができるか、常に意識をして指揮をとっていた。福井（2002）は、高校野球での金属バット導入の歴史の変遷の中で、走者3塁からの攻撃の戦術として、スクイズではなくエンドランが用いられるようになったと報告し

ている。「スクイズの代わりにエンドラン、高校野球でもよくやってるでしょ」（指導者B）という回答からも、高校野球で導入している戦術を「点を取る引き出しを増やす」（指導者K）ために、導入していることが推察された。

「確実に1点」、「ダメ押し」、「先取点」、および「1発勝負」の意味単位は、スクイズのサインを出す場面に関するものとして「状況」のサブカテゴリーに括られた。指導者Oは「相手のピッチャーが外したくないカウントっていうところを狙ってするようにしていますね」と述べている。スクイズという1点を取るための戦術は、「1発勝負」（指導者O）であり、一球で決めなければならない。プレーをする選手自身にもプレッシャーがかかる。それに関して、「失敗したら監督のせいやし、決めた時は子どもの手柄」（指導者O）というように、指導者自身もプレッシャーを感じていた。

「種類」、「状況」のサブカテゴリーは、戦術として使用する「スクイズ」の大カテゴリーに括られた。

3-6. 指導方針

●チームの目標

「勝つこと」、「優勝」、「県大会」、「楽しむ」、「助け合い」、および「声だし」の意味単位は、指導者が少年野球を指導していく上での「目標」として、サブカテゴリーに括られた。指導者Kは「勝つこと、そこなくして成長はないと思ってるんで、バントを決めること、走塁の技術、点をやらなければ負けることはない」と述べている。このように、応用技能や戦術を的確にこなすことが出来ることで、勝ちにつながると考えられていた。一方で、「楽しく野球してくれてたええかなって、バントばかりしててもいやになる時期って絶対にあるやん」（指導者D）というように、試合に勝つよりも、選手自身が楽しむことを目指し、基礎的な練習しか行わない指導者もいることがうかがえた。

「目標」のサブカテゴリーは、指導方針の中での「チームの目標」として、大カテゴリーに括られた。

●指導理念

「感謝」、「挨拶」、「社会性」、「バランス」、「姿勢」、「思考力」、「継続力」、「思いやり」、「競争心」、および「信頼関係」の意味単位は、指導者が選手に野球を通して学んでほしいことに関するものとして、「人間力」のサブカテゴリーに括られた。指導者Cは「地域の貢献だとか部室、倉庫を掃除するだとかね、そういうこともすごい大事だと思いますし、そこがあって、練習の時にどうしていかってというのが出てくるんでしょうね」と述べている。選手が野球をするだけでなく、成長していく過程で、人間性も伸ばすような指導が行われていた。少年野球の指導者に関して、池田（2001）は、「野球『を』教えてくれる大人で

表7 指導方針カテゴリー

分析テーマ	大カテゴリー	サブカテゴリー	意味単位	回答例
指導方針	チームの目標	目標	勝つこと 優勝 県大会 楽しむ 助け合い 声だし	やる以上は勝ちたい こいつらには優勝せいと 県大会には最低でも・県大会を目標にして 楽しめと、好きな野球やってるねんから・野球は楽しい 人に対する助け合い 声を出すこと
		指導理念	感謝 挨拶 社会性 バランス 姿勢 思考力 継続力 思いやり 競争心 信頼関係	感謝されない人に対する感謝 挨拶で始まって挨拶で終わる 子ども自身に全部させる 勉強だけよりも 人に教えてもらう時の態度 考えさせる 中学で野球をやってもらうのが 仲間だから思いやり 競争させる はっきり言えるような関係
	目標に応じた チーム編成の 方針	指導スタイル	取り入れる姿勢 他の指導者との関わり 特異性 楽しい野球 野球だけにならない 経験	僕も勉強せな いろんな監督さんと 少年野球はまた新たに学ばないといけない 楽しんでやってほしい 野球の技術を学ぶよりも・学校で学べないもの そういった指導を今まで受けてきた
		選手の意識	競争意識 努力	競争させる 努力してるやつは使う
		指導者の意識	起用方法 チームの顔 ないがしろにはしない 結果が全て 大会 理想 チームの和	この子をどういった使い方するのか チームの顔 ベンチにいる間は絶対呼んで話しする 結果が全て 大会による 下の学年から3人入るのが理想 6年生がいるならそれで構成したい
	指導の ポイント	指導のポイント	経験 本 前監督 他チームの指導者 少年野球の目線 負けた試合 パソコン	中学校、高校で学んだことを 本を買ったりして読んだり 先代からの教え よそのチームの監督さん レベルを少年まで落としてやらないと 負けた試合はすごい勉強になるんで パソコンでみれるものは

あると同時に、野球『で』教えてくれる大人』であることと述べている。本研究でも、指導者Gの「人間形成の一環として野球を選択しているだけ、野球がすべてじゃない」という言及からも、野球を教えることでだけではなく、人間的な成長を目指した教育的な側面をもった指導が行われていることが示唆された。また、高見（2007）は、ジュニアスポーツにおけるコーチングにおいて、強いチーム作りの基盤となるものは選手自身が「しっかりとした青少年」であることと述べており、コーチングにおける選手の人間的成長の重要性について述べている。これらは中学生・高校生年代に焦点が当てられた見解であるが、今回の調査結果から、小学生年代の選手においても人間的成長が重要とされていることが明らかになった。

「取り入れる姿勢」、「他の指導者との関わり」、「特異性」、「楽しい野球」、「野球だけにならない」、および「経験」

の意味単位は、指導者自身の少年野球に取り組む姿勢に関するものとして、「指導スタイル」のサブカテゴリーに括られた。指導者Bは「試合だけの勝負だけやなしに、その監督さんと一言、二言終わりに話でも出来るようになっていったら、そしたら監督さんからいろいろなこと聞けるし、色々なこと教えてもらえるから」と述べている。野球を選手に教えるだけでなく、指導者自身も成長していくために学んでいくことを目指していた。

「人間力」、「指導スタイル」のサブカテゴリーは、指導に関する理念として「指導理念」の大カテゴリーに括られた。

●目標に応じたチーム編成の方針

「競争意識」、「努力」の意味単位は、チーム編成をする上で、指導者が選手に持たせたい意識として、「選手の意識」のサブカテゴリーに括られた。指導者Oは「なかなか

か学校で競争がない時代になってきてるところで、僕は競争させたいんですよ」と述べている。競争意識を持たせ、チームの底上げを選手に促すことを目指している指導者もいた。

「起用方法」、「チームの顔」、「ないがしろにしない」、「結果が全て」、「大会」、「理想」、および「チームの和」の意味単位は、チーム編成をする上で、指導者自身が考えるものとして、「指導者の意識」のサブカテゴリーに括られた。指導者Dは「見てて分かるやんか、一生懸命やっけないって言うのは、そんな子は出さないな。でもベンチにいる間は絶対呼んで話してる。なんで出れへんか分かるか？って、頑張れよって声はかける。ないがしろには絶対にしない」と述べている。選手に競争意識を持たせる一方で、指導者は選手へのフォローも行っていることが述べられていた。目標に応じたチーム編成の方針からは、選手に競争意識、努力する意識を持たせること、指導者として選手をないがしろにしないことなどからも、選手を野球という媒体を通して育てていくことが推察される。

「選手の意識」、「指導者の意識」のサブカテゴリーは、チームとしての目標を達成していくための、選手の起用に関するものとして「目標に応じたチーム編成の方針」の大カテゴリーに括られた。

●指導のポイント

「経験」、「本」、「前監督」、「他チームの指導者」、「少年野球の目線」、「負けた試合」、および「パソコン」の意味単位は、指導者が選手への指導を行う際のポイントをとどのようにして得ているのかに関したのものとして、「指導のポイント」のサブカテゴリーに括られた。「指導のポイント」に関して、自分の今までの野球経験を基にする指導者が多いものの、「高校のことを教えても絶対無理やし、小学生になったらどうしたらええんか」（指導者E）という回答から、参考書となる指導書や周りのコーチ、他チームの指導者の考えを踏まえ、「少年」野球の指導方法を考えていた。さらに、「私も努力しないと、子どもたちに教える以上は」（指導者B）というように、指導者自身の成長も目指されていることが示唆された。

「指導のポイント」のサブカテゴリーは、指導していく上でのポイントとして「指導のポイント」の大カテゴリーに括られた。

4. まとめ

本研究の結果および考察から、少年野球におけるコーチングを図1にまとめた。

少年野球におけるコーチングは、指導方針を基に、指導者は基礎技能、そして応用技能・戦術に発展していくとい

う、段階的な指導を行っていた。また、教えることが野球の応用的技術に移っても、基礎技能の反復に戻るという傾向が見られた。基礎技能は、直接選手自身の動作に結びつく指導が行われること、そして基礎的な技能獲得のために少年野球のレベルに応じた指導が重要であることが分かった。応用技能に関しては、実践場面で試される内容が含まれており、試合を想定した技能であることが明らかになった。「走る」ことに関する指導が少ないこと、勝つためには「走塁」が重要であることの指摘から、今後は、「走」の面について指導を強化していくことが課題として挙げられるであろう。戦術において、エンドランの項目の中でも走塁技術の重要性が示唆された。さらに点を取るための有効な手段の一つとして、エンドランをスクイズとして取り入れていたことが明らかになった。指導方針としては、選手に楽しく野球をしてほしいという指導者ほど、基礎技能を教えていることが分かった。一方で、勝ちに拘っている指導者については、より応用技能や戦術の面に力を入れて指導している傾向がうかがえた。

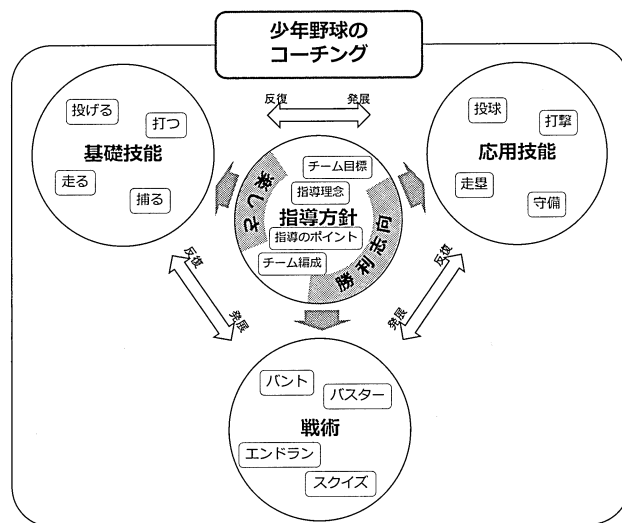


図1 少年野球のコーチングスタイル

また、基礎技能や応用技能で挙げられた指導方法は、少年野球の指導書（株式会社ヤクルト球団，2011；横浜ベイスターズ・スポーツコミュニティ，2011；立花，2011）で挙げられた指導内容と合致していることがほとんどであった。さらに、インタビューの回答では、指導のポイントを学ぶ点において、本などの指導書から学ぶことも挙げられており、より良い指導のために自身のコーチングの成長をも目指していることが明らかになった。

指導者のコーチングを明らかにすることは、指導者の発話からの分析によって思考プロセスを明らかにする方法論的な点から、多くの困難を伴うものである。しかし、こうした指導現場でのコーチングを明らかにすることは、自身

の指導方法を再確認する指導者や経験の浅い指導者にとっては、有効な判断材料にもなり得るものと考えられ、本研究から、少年野球の指導を行う上での、実践場面での応用が期待される。

本研究において、いくつかの課題も残されている。本調査では、「人間力」を高めるための多くの項目が挙げられ、実際の選手の指導場面においても指導されていることが推察される。しかし、本調査では指導者を対象にインタビュー調査を行ったため、実際の指導場面での選手との関わりを追跡した調査を行っていない。今後、指導者と選手の関わりを追跡した調査が必要となるであろう。

文 献

- 阿江通良・藤井範久 (2002) スポーツバイオメカニクス 20講, 朝倉書店.
- Cote, J., Salmela, J., and Baria, A., Russel, S. (1993) Organizing and Interpreting Unstructured Qualitative Data. *The Sport Psychologist*, 7, 127-137.
- 福井元 (2002) 高校野球界における金属製バットの導入と技術・戦術の変容: 昭和40年代以降の甲子園大会を中心に, *スポーツ史研究* (15), 29-45.
- 福富恵介・春日晃章・内藤譲 (2013) 満4歳を迎える年少児における投動作の指導ポイントの検討-投能力別の3次元動作分析の比較から-, *スポーツパフォーマンス研究*, 5, 163-175.
- 廣江嘉吉 (1986) 野球におけるバントについて, *中央大学体育研究* (20), 73-82.
- 池田尚 (2001) 少年野球指導法の“秘伝”の共有, *青少年問題*, 48 (10), 22-27.
- 石井源信・石川国広・高見和至・後藤肇 (1994) No. III ジュニア期のメンタルマネジメントに関する研究-第1報-, 2-2 ジュニア期における優秀指導者の実態に関する調査研究, 平成5年度日本オリンピック委員会スポーツ医・科学研究報告.
- 石井源信・石川国広・高見和至・後藤肇 (1995) No. III ジュニア期のメンタルマネジメントに関する研究-第2報-, 2-1 ジュニア期における優秀指導者の実態に関する調査研究, 平成6年度日本オリンピック委員会スポーツ医・科学研究報告.
- 石井源信・石川国広・高見和至・後藤肇 (1996) No. III ジュニア期のメンタルマネジメントに関する研究-第3報-, 2-1 ジュニア期における優秀指導者の実態に関する調査研究-追跡面接調査の結果をもとにして-平成7年度日本オリンピック委員会スポーツ医・科学研究報告.
- 伊藤博一・河崎尚史・井尻哲也・眞瀬垣啓・中嶋寛之・渡會公治 (2012) 成長期少年野球選手の投動作における経年変化, *日本臨床スポーツ学会医学雑誌*, 20 (3), 526-535.
- 株式会社ヤクルト球団 (2011) 東京ヤクルトスワローズの野球教本 少年軟式野球 基本編; 投手編; バッティング編, 舵社.
- 金堀哲也・川村卓・松尾知之・浅岡正雄・山田幸雄・曾田宏 (2012) 我が国の指導書からみた野球の打撃指導における指導者の着眼点-動作局面における指導対象部位に着目して-, *コーチング研究*, 25 (2), 149-156.
- 神田順治・渡辺融 (1961) 野球における規則とグラブ, ミットと技術との関係について, *体育学研究*, 6 (1), 245.
- 北村勝朗・斎藤茂・永山貴洋 (2005) 優れた指導者はいかにして選手とチームのパフォーマンスを高めるのか?-質的分析によるエキスパート高等学校サッカー指導者のコーチング・メンタルモデルの構築-, *スポーツ心理学研究*, 第32巻 (1), 17-28.
- 古賀康彦・堀野博幸 (2013) Jリーグクラブ・ユース指導者と高等学校サッカー部指導者との指導哲学の比較, *スポーツ科学研究*, 10, 173-182.
- 功力靖雄 (1992) 野球の守備機会に関する研究-内野手の守備隊形を中心に-, *大学体育研究*, 14, 63-73.
- 永井洋一 (2004) スポーツは「良い子」を育てるか, NHK 出版.
- 永井洋一 (2007) 少年スポーツ ダメな指導者 バカな親, 合同出版.
- 中島一・図子浩二 (2009) 野球のバッティングパフォーマンスを高めるためのスイング動作習得法, *スポーツパフォーマンス研究*, 1, 202-210.
- 中村和彦 (2008) 今日の子どものスポーツの問題点を探る, *児童心理*, 62 (14), 1319-1324.
- 立花龍司 (2011) 立花龍司のメジャー流少年野球コーチング小学生編, 高橋書店.
- 高見和至 (2007) ジュニアスポーツにおけるコーチング, *体育の科学*, 第57巻, 第2号, 106-111.
- 山本博男・鈴木孝佳・鈴木清貴・川崎繁次・野村いずみ (2012) 金沢大学付属高校における走塁の効率の指導実践, *金沢大学教育実践研究* (38), 37-43.
- 横浜ベイスターズ・スポーツコミュニティ (2011) プロが教える少年野球の練習&矯正法, マイナビ.
- 全日本軟式野球連盟. 連盟概要: 登録チーム: 都道府県別登録チーム数 (平成24年度). <http://jsbb.or.jp/outline/teams>, (参照日2014年1月10日)